

「災害死のない社会に」

仙台市で14日に開幕する国連防災世界会議では、世界各地で被災した子どもや若者も災害の教訓を発信する。東日本大震災で両親を亡くした岩手県陸前高田市出身の筑波大3年、菊地将大さん(21)は15日のフォーラムに登壇し、「助け合うことにより、災害で誰も死なない社会を作ろう」と呼び掛ける。

(2面参照)

大震災で両親亡くした21歳

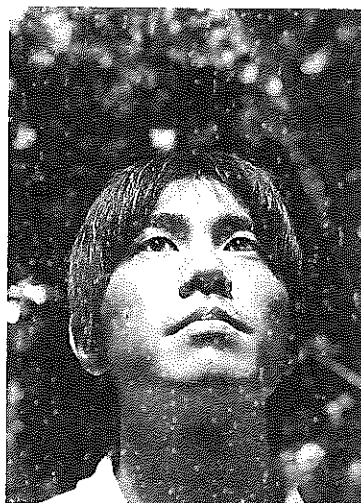
高校2年だった4年(当時49歳)と母陽子前の3月11日。津波襲来の際、菊地さんは自宅から自転車で数分の高台に向かった。黒い津波が海岸線の松林をなぎ倒しながら進んできた。自宅は無事だったが、沿岸部の勤務先にそれだけ向かった父博幸さん

防災会議で教訓発信へ

はがれきなどで傷つき、一目では分からなかった。震災が起きてから、初めて泣いた。無事だった祖母(78)と2人での暮らしが始まった。「悲しんでいる暇はない。息子を亡くした祖母のためにも、とにかく一歩を踏み出したい」。そんな思いが強かった。

転機は6月に訪れた。スイスの国連欧州本部に核兵器廃絶の署名を届ける「高校生平和大使」に選ばれた。その後も、遺児などを支援する団体の招きで、同時多発テロでビルが倒壊した米ニューヨークや、2013年11月に台風で大きな被害を受けたフィリピンなど、理不尽に命が奪われた現場を訪れることができた。「どこに行っても立ち上がる」と頑張っている人たちがいて、励まされた。

大学進学で陸前高田を離れたが、眠れないときに古里の地図を脳裏に思い描く。野球の試合をした球場、ラ



国連防災世界会議で震災の教訓と防災の大切さを訴える菊地将大さん(東京港区で、竹内幹撮影)

道筋は、若者も含めた被災者が主体的に考え、被災者が主体的に考えるべきだと感じている。フォーラムでは、

前回の05年の国連防災会議で採択された「兵庫行動枠組」には、「若者」への言及は一言もなく、「子ども」も災害から保護されるべき対象として記載されていただけだった。

だが今回は、将来決定的な場に、その時代を生きている子どもや若者が参画できる環境を整える必要性が議論される。

【金森崇之】